
ドS婚約者

日向莉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DS婚約者

【コード】

N0740Z

【作者名】

日向莉子

【あらすじ】

「この俺に逆らうき？」 「このDS婚約者め…」

まだ若い美咲と同一年の誠二。お金持ちという肩書きのせいで無理矢理婚約者を決められてしまった。だがそんな美咲も誠二に引かれていく。恋愛を知らない美咲と、DS婚約者誠二が愛し合う甘い甘いラブストーリー。

初面会

東野美咲、15歳。

美咲の父は、大手有名会社の社長。

家はもちろん、別荘がいくつもあり、迷子になりそうなほど広い。

そんなまだまだ若い美咲だが、今日は、美咲の婚約者の所へ行くことになっていた。

「私、見知らぬ男なんかと結婚なんてしたくないわ！お父様、私は自分が結婚したいと思った男性と結婚します！」

東野家の使用人が運転する車の中で、美咲は父（聡一郎）に反抗していた。

「まあまあ、美咲落ち着きなさい。ただの婚約者というだけだ。それに彼はとても素敵な方だ。」

聡一郎はそういうと、ニコツと美咲に微笑んだ。

そんな聡一郎を前に美咲は不安でいっぱいだった。

一度も会ったことない、それに美咲はまだこんなに若い、なのにも婚約者がいる。

「お母様」

美咲は見方を作ろうと母（清子）にねだる。

「美咲ったら。会ってみて美咲が気に入らない相手ならまた、考えましょう。ね？」

美咲は、清子の言葉に納得し、頬を膨らませた。

「到着致しました」

東野家使用人が、車の戸を開け、聡一郎、清子、美咲の順番で車から降りた。

美咲の前には、大きな屋敷。美咲の家より少し大きい。

「東野様ですね、お待ちしております」

すると相手の使用人らしき人が、美咲たちに屋敷を案内した。

「お父様…、迷子になりそうだわ…」

美咲は聡一郎の袖を掴み、相手の使用人に案内されるがまま屋敷の中に入っていった。

「旦那様、東野様にご到着されました」

「どござ」

部屋の中から鋭い声が聞こえる。

相手の使用人が部屋の戸を開けると、そこにはこの家の人たちがテーブルの椅子に腰を掛けていた。

「東野さん、お久しぶりです」

「久しぶりですね、藤倉さん」

聡一郎とこの家の持ち主（藤倉正人）は、前に会ったことがあるようだ。

美咲は正人の奥にいる男に見られていることに気づいた。

凄く怖いんですけど…

美咲たちは、正人たちと反対の椅子に腰を掛けた。

「こちらが私の娘の美咲です」

美咲は聡一郎と目が合い、あいさつしなさいと目で訴えているのがわかった。

「東野美咲です。初めまして」

「可愛い子ですね。誠二、お前もあいさつしなさい」

誠二…。彼は面倒くさそうに口を開いた。

「藤倉誠二です、初めまして」

顔もイケメンで、声も低音で見た目は完璧。

だが、見た目だけでは中身を見ることができない。

「そしたら、美咲と誠二君は別室で話しててもらおう。私と藤倉さんでお話することがあるからな」

「え！ちょっとお父様！？私そんなこと一度も……」

すると聡一郎は、黙って行きなさいと言わんばかりの眼差しを美咲に向けた。

「誠二、案内してあげなさい」

正人がいうと誠二は無言で部屋を出ていった。

美咲はそれを追うように彼についていった。

彼は無言で別室に向かう。

美咲は彼の後ろ姿をただ見つめるだけだった。

するといきなり彼は立ち止まり、別室らしき部屋に入っていった。

変貌

美咲は誠二が入っていった部屋の戸をゆっくりと開けた。

美咲が見た光景は誠二がソファにドカッと座り、足を組んでリラックスをしている姿だった。

「お前もそこ座ったら？」

いきなり声をかけられ驚く美咲。

どこかムカつくこの男……。

「私はこっちに座ります。あなたの真正面などお断りです」

美咲は少し声に怒りを込め、誠二とは離れた場所の椅子に座った。

するといつの間にか誠二が美咲の真後ろに近寄ってきていた。

「うわっ！いきなり背後に来ないでよ！ていうか近寄らないで！」

美咲はすぐさま誠二から離れる。

「こんなイケメンがすぐ目の前にいるのに避けるとか、勿体無い奴」

やはり見た目だけでは判断できないものがある。

美咲の額には一粒の汗。

今まで近寄ってくる男は全て拒んできた。

美咲が唯一拒まなかったのは、父の聡一郎のみ。

「どこがイケメンなの？男なんてみんな気持ち悪いのよ！」

すると誠二は立ち止まって俯いた。

いいすぎたかしら・・・？

美咲は誠二の顔を覗き込むように近寄っていく。

「ご、ごめんなさい・・・。初対面の方に気持ち悪いなんていいすぎたわ」

彼はまだ俯いたままだ。まさか、泣いているなんてこと・・・。

そこまで弱い男はいないと思っていたけれど・・・。

「だから、ごめんなさいって謝ってるじゃない・・・」

そして美咲が誠二に一メートル以内の区域に入った。

すると彼は美咲の腕を引っ張り、自分の方へ引き付けた。

な、な、なに！？

驚きを隠せない美咲は、呆然となっていたがすぐに我に返り抵抗をした。

「ちょっと離してよ！気持ち悪い！」

そういつて美咲は誠二の胸を手で押し返した。

「へ〜・・・、初めて見たこんな奴。俺に抵抗するんだ〜」

な、なんなのこいつ・・・。き、気持ち悪い！

美咲はすぐさまこの部屋から出て行こうとしたが、鍵が掛かっている。

「え、なんで？開いてー！」

「魔法の扉じゃねんだから、言葉で言っても開かねえよ。バーカ」

「あ、あんた誰に向かってそんなこと言ってるのよ！こんな奴と婚約なんて絶対嫌！お父様！」

美咲の目には溢れるほどの涙が溜まっていた。

男なんて誰一人として信用できない（お父様意外）。

すると握っていたドアノブがガチャッと音を立てた。

「お、お父様・・・。」

「どうしたんだい？誠二君すまなかったね、美咲が迷惑をかけてしまったように」

「いえ、美咲さんはとても素敵な方です」

誠二の変わりように美咲は恐ろしさを覚えた。

その日は東野家に帰った。

帰りの車の中で美咲は誠二の変貌を聡一郎に訴え続けたが、まったく信じてもらえなかった。

高校生活

あれから一週間後。

美咲は大金持ちが通う、桜庭美学園に通うことになった。

「お父様、お母様、いってきます」

指定された制服を着て、学校へ向かおうとしていた。

「気をつけて行って来なさい。向こうには誠二君もいることだから、安心だ」

・・・誠二君？つて、あの！？

美咲は車の中で頭をグルグル回転させていた。

確かに同い年ということもありながら、誠二も将来のために必ず学校へ行かなければならなかった。

「お嬢様、ご到着いたしました」

学校に着いたようだ。運転手が車の戸を開けた。

美咲は恐る恐る車を降りた。その後ろに一台のリムジンが止められている。

「いってらっしゃいませ、お嬢様」

そういつて東野家使用人は車を走らせ行ってしまった。

美咲はどんな人が出てくるのだろうかとうと拝見しようとしたが、車の戸を開けた瞬間、周りの女が大勢駆け寄ってきた。

「え、何これ？そんなに有名人なの？」

「有名人も何も、この車と言ったら藤倉家の御曹司、誠二様しかいませんわよ」

独り言で呟いたつもりが、隣の彼女には聞こえていたようだ。

美咲はこの車に乗っている人物がようやく分かった。・・・藤倉誠二。

「ほら、あなたも見に行きますわよ！」

そういわれ、彼女に手を引っ張られ、大勢の女をかき分けながら一番前まで来てしまった。

美咲は呆然とし、前から来る誠二を見ていた。

何あれ、女つたらしだわ！私よりたくさん綺麗な女性はいっぱいいるのだから私じゃなくてもいいのよ！

すると誠二は美咲のいるところで足を止めた。

「嫉妬、してくれた？」

そう美咲に言い残し、彼はその場を断った。

な、な、な、何なのよ！

「やっぱり、かつこいいですわ！私、沢乃原由梨華と申します。あなたは？」

「東野・・・美咲」

そうして美咲の高校生活は始まりを迎えた。

由梨華は、どうして美咲に“嫉妬、してくれた？”などと言ったのかしつこく聞いてきた。

美咲は“あの人、私の婚約者なの”と言うと由梨華は大はしゃぎで“美咲といれば、誠二様の近くにいれるわ！”と言いつづけた。

残念ながら、美咲は誠二との婚約は反対していて、美咲は誠二を避けている。

授業中、背後からの誠二の視線を感じていた。

・・・絶対見てる・・・

「ねえねえ、誠二様・・・美咲見てない？」

美咲は由梨華から話しかけられたが、無視して授業に集中した。

授業が終わったら、大勢の女子が誠二の周りを囲むため、美咲は救われていた。

そうしてそんな学校生活が続いていくと思っていた。

だが、そんな美咲の前にあの人が現れるとも知らず・・・

招待

高校生活始まり、あっという間に1ヶ月が過ぎていた。

この1ヶ月、普通の高校生と変わらない日々を送ってきた。

相変わらず誠二は美咲に視線を送り続けている。美咲はそれを跳ね返していた。

「東野美咲って子、このクラス？」

「え、あ、はい！私のことですか・・・ね」

美咲に話しかけてきたのは、他のクラスの男子生徒だった。

「職員室に来てって」

「あ、はい。由梨華、ちょっと行ってくるね」

そういつて美咲はその男子生徒と職員室に向かった。

その光景をずっと誠二が見ていたことも知らず・・・。

「失礼します・・・」

「あ、東野さん。これ、教室まで持っていってくれないかな」

先生が言った“これ”とは、山済みにされている紙だった。

美咲はクラスの代表に選ばれていたからだ。付き添いの男子生徒も。

山済みにされた紙を渡された美咲には、重すぎて耐えられなかった。

「おっと・・・俺、持つよ」

「あ、ありがとう・・・」

名前も知らないこの男子生徒。とても優しそうで、誠二とは大違いだった。

教室に着き、教卓に紙を置くと「じゃ」といって立ち去ろうとした。

「あ、あの！名前・・・」

咄嗟に美咲は親切にしてくれたのに名前も知らず去られるのは嫌だ
と思い、名前を聞いた。

「齋藤隆介」

そういって齋藤はニコツと笑って行ってしまった。

ドキッ・・・え、何ドキッて！

「意外とイケメンな人だね」

由梨華がそういいながら近づいてくる。私は由梨華のその言葉に同
感した。

そうして美咲は齋藤と会話をする機会が増えた。もちろん誠二とは

全く口を聞いていない。

「今日、俺の屋敷に来ないか？」

斎藤がいきなり自分の屋敷に招待すると言い出した。

もちろん美咲は悩んだ。婚約者もいる（まあ、結婚する気はない）し……。

……少しならいいかな

「じゃあ、由梨華も連れてでいいかな？」

「俺も行く」

すると後ろから誠二が割り込んできた。

誠二の顔はとても怒りに満ちているようだ。美咲はその意味が分からなかった。

「いいぜ、今日学校終わったら俺の車について来て」

そういつて美咲、由梨華、そして誠二で斎藤の家を訪れることになった。

美咲は誠二がいることがどうしても納得いかなかった。

「何あいつ、ストーカーなのかしら……」

「私は誠二様がいてくれて安心だと思っわよ。美咲、男は下心無い

方なんていないんだからね！」

由梨華が言っている意味がよくわからなかった美咲。

そうして斎藤の家に向かうのであった。

斎藤家

斎藤の家に着いた三人は車を降りると斎藤に案内され、周りを見渡していた。

誠二の家より小さく、迷子にはならなさそうだ。

「俺の家より断然小さいな」

誠二がそう呟いた言葉はみんなに聞こえていた。

やっぱり連れて来るんじゃないかと後悔する美咲だった。

案内された部屋は斎藤の部屋でそこはシンプルで男らしい感じだった。

「うわ、男の子の部屋初めて入った・・・」

美咲がそう言うと誠二の眉がピクリと動いた。

「じゃあ俺、美咲の一番だ。ははは」

斎藤がそういうと誠二はムスツとした。“美咲”と名前を呼んでいたのもあるだろうけど。

そして斎藤の部屋で数時間お茶会っばいことをした。

「私、お手洗いきたいんだけど・・・」

「あ、案内するよ」

そついつて美咲と斎藤は部屋から出て行った。

由梨華と誠二が二人残され、誠二はまだムスツとした顔をしていた。

「嫉妬しているのはどちらかしらね、もしかしたらお手洗いじゃなくて別室行ってるかもよ？」

すると誠二は舌打ちをして、よけい眉間に皺を寄せた。

一方美咲たちは・・・

「俺ここで待つとくから」

美咲はちゃんとお手洗いに行っていた。だが、斎藤はこれをチャンスだと思っていたのだ。

美咲がお手洗いから出てくると斎藤は近くの部屋に美咲の腕を掴んで連れ込んだ。

「斎藤君？痛い・・・どうしたの？」

美咲が連れ込まれた部屋はお金持ちにしてはかなり狭い部屋だった。シングルベッドが一つ、そして物置のようになっている。

“下心無い方なんていないんだからね！”

美咲の脳裏に由梨華が言っていた言葉が浮かんだ。でも斎藤はそん

な人ではないと思っっている美咲。

「俺・・・美咲のこと・・・」

そういいながら斎藤は美咲をベッドに押し倒す。そして斎藤は馬乗りをする。

「美咲のことが好きだ」

美咲の目にはたくさんの涙が溜まっていた。

「やめて・・・どけて・・・」

そういつて無理矢理行為を求めてくる斎藤に反抗する美咲。

するといきなり部屋のドアが開いた。斎藤は手を止め、ドアの方を見る。

そこには、誠二がいた。誠二は美咲が押し倒され、泣いているのを見ると斎藤を睨んだ。

「てめえ、何してんだよ」

「別に、藤倉君に関係なくない？」

斎藤が喧嘩を売るように言うと、誠二は斎藤の胸倉を掴んだ。

「こいつは俺の女だ。近寄るんじゃない」

そついい捨てた誠二は私の手を掴んで、部屋から出た。美咲はただ

ただ泣いた。

誠二は美咲を連れて斉藤の屋敷を出た。美咲はいつの間にか藤倉家のリムジンの中にいた。

もちろん到着地は藤倉家。さすがの美咲も躊躇い、無言で立ち尽くした。

「大丈夫、俺は俺が好きじゃない女に手を出したりしない」

そういうと誠二は足を進めていった。美咲は無意識に誠二の袖を掴んでいた。

「……………もしもし、藤倉誠二です。今日はこちらで美咲さんを預らせてください……………はい……………失礼致します」

誠二は東野家に電話をかけ終わると美咲を自分の部屋に入れた。

「じゃあ、俺は行くから。しばらくしたら女使用人がくるから」

誠二が部屋を出て行くこうとすると、無意識に美咲は誠二の服を引っ張っていた。

「一人にしないでよ……………」

上目遣いで誠二を見る美咲は、誠二にとって理性を保つのが精一杯なくらい可愛かった。

弱み

やっと泣き止んだ美咲の目は赤く腫れていた。

部屋の中には誠二と美咲の二人。そんな沈黙の中を破ったのは誠二だった。

「沢乃原に言われたろ、下心無い奴はいないって。お前鈍感なんだから気をつけるよ」

「だって斎藤君は・・・優しかったから・・・」

切なそうに言う美咲の顔を見て、誠二はイラつきを抑えられなかった。

「お前はあいつにあんなことされてもあいつを庇うのかよ・・・俺助けた意味ねえじゃん」

そういつて誠二は美咲のそばから離れていく。その時の彼の顔はとも怒っていてどこか切なそうだった。

庇っているわけじゃない・・・でも、本当に優しい人なんだもん・・・助けてくれたことだって本当は・・・。

「助けてくれたことは感謝してるもん・・・、ちょっとドキツとした・・・でも婚約はしたくない」

最後のよけいな一言で誠二の機嫌がまた悪くなった。

「そんなこと言っているのか？俺はお前の恩人だぞ？俺が助けに行つてなかったらお前は今頃あーんなことやこーんなことされてるかもな〜」

なんなの、こいつ！ムカつく！

美咲はだんだん誠二にムカついてきた。

「お前の両親に言つてやるつか？」

その言葉に美咲は驚き、咄嗟に素直になる。

「本当に感謝してます！ありがとうございます！結婚でもなんでもするから今回のことは誰にも言わないで！お父様には迷惑かけたくないの」

上目遣いで訴えてくる美咲に誠二は断れなかった。すると誠二の頭に何かが浮かんだようだ。

「なんでもするって言ったよな？だったら明日、俺とデートして」

「・・・は？」

美咲の頭の上には、ハテナマークが並んだ。

今この人、何て言った？俺とデートしてって言った？

「嫌です」

「そんな」と言っているの？」

弱みを握られている美咲は誠二に反対することなど出来なかった。

「もう！わかったわよ！すればいいんでしょ！」

そうとうと誠二はニヤツと微笑んで「それと・・・」と付け足しをしてきた。

「俺のことは誠二って呼ぶこと」

誠二はそういい残すとお風呂へ行ってしまった。

「もう！何なのよ！」

美咲は反抗できない誠二にムカついていた。そしていつの間にか美咲はベッドに横になり眠ってしまった。

「おい、上がったからお前も・・・」

誠二がお風呂から上がった時には美咲は既に眠っていた。

誠二は美咲が寝ているベッドに座り、美咲の寝顔を見つめていた。

「・・・この顔、反則だろ」

そうして誠二もいつの間にか美咲と同じベッドに横になり、眠ってしまった。

誠二

目が覚めると美咲の目の前には誠二の寝顔が合った。

「きゃあああああああああ！」

美咲は誠二を押し離し、ベッドから離れた。

「いてえな……」

「な、な、な、な何であんたが私と同じベッドに寝てんのよ！信じられない！それにどうして上半身裸なのよ！」

そっぴいなながら美咲は誠二に背中を向けた。

「もう、家に帰る！電話借りるわよ！」

近くにあつた電話を借りて、東野家の車を呼んだ。

そして勢いよく部屋を出て行ったかと思うとゆっくりとドアを開けて

「……玄関まで案内してください」

恥ずかしながら言う美咲の顔に誠二は頬を染めフツと笑い、美咲の頭をポンツと叩いて「ついて来い」と言った。

お金持ちの美咲だと言っても藤倉家に慣れない者は必ず迷子になるであらう。

誠二に案内されるがまま、玄関に到着した。既に東野家のリムジンが到着していた。

「１時に迎えに行くから」

「・・・え？」

「１時？迎え？」

美咲は昨日のことを思い出した。“俺とデートして”という言葉を。

只今の時刻、１０時。

「は、早く！急いで！」

女の子はおめかしをしていくのが当然。でも相手は美咲が嫌いな誠二。なのにも関わらず美咲は無意識に誠二とのデートを楽しみにしていた。

東野家では、聡一郎は仕事で家におらず、清子は同窓会へ行くと言っていない。いるのは数名の使用人たちのみだった。

「お嬢様、昼食の準備ができました」

「わかったわ、すぐに向かいます」

そっぴいなながら美咲は着ていく服を選んでいった。

いつの間にか刻々と時間は過ぎていき、あっという間に１時になっていた。窓から外を見ると藤倉家のリムジンが止まっているのが見

えた。

美咲は小走りで誠二に近づいていった。

「・・・思いつきり気合入れたな」

「あ、いや・・・似合っていないかしら？」

美咲がそう言うと誠二は黙って美咲に背中を向け、ボソツと「すごい可愛い」と呟いた。

「え？何？聞こえない」

「別に何も言ってるねーよ、いいから早く乗れ」

誤魔化す誠二の頬は少しピンク色に染まっていた。

行く途中の車の中は心臓の音が聞こえそうなくらいの静けさだった。

「到着いたしました」

藤倉家使用人が車の戸を開けると動物園に到着していた。

「動物園なんて何年ぶりかしら」

そういつて美咲は子供がはしゃぐような足取りで動物園の中に入っていた。一方誠二はよかったと一安心して、クールに美咲の後を追った。

「ねえ、見て！象だよ！やっぱり大きいわね。あ、あっちにゴリ

ラいるんだって！行こう！」

次々と突っ走っていく美咲。誠二はとうとなかなか自分の名前を呼ばない美咲にイライラとしていた。

「ゴリラだ、あなたそっくりよ！」

美咲は誠二の顔を指差し、お腹を抱えて笑った。誠二は美咲の指差す手を掴んだ。

「美咲」

いきなり初めて名前を呼ばれ、美咲は驚き笑いが引いた。

「美咲、俺の名前呼べよ。あなたとか俺だってちゃんと名前があるんだよ」

そついう誠二の顔はとても真剣だった。

そんな誠二に美咲は申し訳無さそうな顔をした。するといきなり誠二は美咲に背を向け、歩き出してしまった。

「ちょっと待ってよ！ごめんなさいってば！」

聞く耳を持たない誠二。美咲は少し顔を赤くしながら言った。

「誠二！・・・待って」

すると誠二は立ち止まり、美咲は誠二に駆け寄っていった。

「じゅめんね・・・誠二・・・」

そういつと誠二は肩を震わせながら押さえ笑いをした。

ゴリラと猿

誠二が肩を震わせながら笑っているのを見て美咲は苛立ちが込み上げた。

「引っ掛けたのね！なんて悪人なの！」

美咲は顔を真っ赤にして、頬を膨らませた。

「引っ掛かる美咲が悪い。あー、笑いすぎてお腹痛い」

ムカつくー！何この男！

「美咲って意外と単純？ていうか、バカってやつ？」

誠二がそついうとまた笑い出した。美咲はもつともつと怒りが込み上げる。

「最低！最悪！バカ！アホ！・・・ゴリラ！」

美咲もさすがに最後の“ゴリラ”には、躊躇いを持ったが口が滑ってしまった。

「俺がゴリラだったら、美咲は猿だな」

「な、なんですって！？この私を猿呼ばわりするなんて！なんて失礼な！」

「じゃあ、美咲だって俺をゴリラ呼ばわりして失礼じゃないとでも？」

すると美咲は何も言い返せなくなり、怒りだけが込み上げるだけだった。

相変わらず誠二はお腹を抱えて笑っている。

「ねえねえ、あそこのカップルとても美男美女じゃない？」

「ホントだ。男の子の方、すごいカッコイイね！どこかのモデルかな？」

どこからか聞こえてくるその声に美咲は一人ぼっちになった気分だった。

どうしてあいつが褒められてるのよ！

美咲の頭の中のどこかで嫉妬があったのだろう。怒りより哀しみが増えていく。

「美咲、妬いてる？」

「ち、違っわよー！」

凶星だった美咲は顔を真っ赤にしながら否定する。

「笑い死にしそう・・・、美咲見に行くか」

そういつて誠二は美咲の手を取り、歩き出した。

行き先はもちろん、猿。

「美咲がいつぱいいるぜ」

すると誠二は美咲に満面の笑みを見せた。美咲はその笑顔を見て、少し顔を赤らめた。

どうしてこんな奴のこと・・・意識してるの・・・？手を握られても悪い気しないし、笑顔見せられてドキドキして、これだったら普通の女の子だわ・・・。

そうしていつの間にか閉園になるまで、動物たちを見回っていた。

「そろそろか・・・」

もう少しでこの楽しい時間が終わってしまうと思った美咲の顔は、とても寂しそうだった。

その顔を見た誠二は美咲の頭をポンツと叩いた。

美咲は叩かれたところを両手で押さえ、誠二を見た。

「そんなに俺が恋しい？」

その言い方は美咲にとって頭に来るものだった。

「別に恋しいなんて思ってないわよ！早く帰るわよ！」

またも凶星を言われる美咲。そんな美咲は照れ隠しとしてさっさと動物園から出て行った。

そんな美咲を見て誠二は「バーカ」と小さな笑いを見せた。

動物園の前には藤倉家のリムジンが止まっていた。

美咲、誠二の順に乗って藤倉家使用人は車を走らせた。

「ねえ、どうしてあの時……助けに来てくれたの？」

ポツンと呟いた美咲の言葉は誠二の耳に届いていた。

「あ、えっと、さっきのは気にしないで……」

「沢乃原に美咲が襲われてるかもよ」とか言われて、それで帰ってくるの遅かったからトイレ見に行ってもいねーし、そしたら近くの部屋から物音が聞こえて……そしたらあいつが美咲を……。あのさ、本当に何もされてないんだよね？」

「うん……」

まさかここまで考えてくれたなんて……。

美咲は誠二の優しい心にだんだん引かれていっていた。

そして東野家に着き、美咲は車から降りると、誠二は行ってしまった。

その夜、美咲の頭は誠二でいっぱいになっていた。

好きと嫉妬

誠二とのデートの翌日。

美咲は上気分で学校へ向かった。

「美咲！」

後ろから呼ばれ、振り返ると由梨華の怖い顔が飛んできた。

「あなた、あの後連絡もなしに先に帰ったでしょ！しかも誠二様と一緒に！私、置き去りにされたのよ！？誠二様は部屋から出て行っちゃうし、帰ってきたのは斎藤で、さっさと帰ってくれる？って言われたのよ！？どういうことよ！」

怒りが止まらない由梨華に「まあまあ」と言うと「お昼にすっかり聞かせてもらっわよ」と言われ、根掘り葉掘り聞き出され、昨日デートをしていたことも言わされた。

由梨華の怒りは放課後になっても治まることはなかった。

そして放課後。美咲が教室を出ようとしたときだった。戸の前には斎藤が立っていた。

美咲は戸惑いながら、逆の戸から出ようとする。

「美咲！話があるんだ・・・、少しでいい、俺に時間をくれないか」

斎藤の目は、とても真剣なものだった。

美咲もあの事と向き合わなければならぬとは思っていた。

そして美咲と斎藤は、二人きりの教室の中で話し合った。

するといきなり斎藤が美咲に頭を下げ、

「本当にすまなかった！いきなりあんなことして、ただで許されるなんて思っていない」

何度も何度も謝罪してくる斎藤。

「いえ、もういいの。もう二度とこんなことしないと誓ってくれるなら……」

「誓う！もう、もう二度とこんなことしない！本当にすまない！」

何度も、何度も頭を下げ、謝ってきた。でも「好きだったのは本当だから」そういつてくる彼は嘘をついているとは思えなかった。

「ごめんなさい……、私……」

美咲が言いかけるとその先の言葉がわかっていたかのように斎藤は美咲の言葉を遮った。

「わかってる……、藤倉君が、好きなんだろ？」

自分でも認めたくないと思っている美咲だが、あのデートの夜、誠二から頭が離れなかった。

それは、きつと、好きだから・・・。

「ごめんなさい、でも嬉しかったわ。ありがとう、じゃあ、私行くね」

「おう！こっちこそありがとう！」

そういつて問題は解決した。

美咲は教室を後にし、靴箱へ行くと誠二が立っていた。

「え・・・、どうして？帰ったんじゃないの？」

すると誠二は美咲の顔を見て深刻な顔で言った。

「・・・お前さ、少しくらい警戒しろよ！どうして襲われた奴なんかと気軽に話してんだよ！ホント・・・ほっとけねえ」

心配、してくれてたのかしら？

美咲は突然、クスツと笑い頬を少し赤く染めた。

「何笑ってんだよ、こっちは真剣なんだぞ！」

そういう彼の顔は本当に真剣だった。でも美咲はクスクスと笑いを止めない。

「私が男と話してたら、誠二は嫉妬しちゃうの？」

すると誠二は凶星を言われ顔を少し赤くした。

「嫉妬してるのは誠二の方だね。いつも私に妬いてるの？とか嫉妬してるの？とか言ってくるくせに、本当は誠二が一番・・・」

美咲の言葉は誠二の唇によって遮られた。

「ちょっと！何よ、いきなり！」

誠二の唇が離れた時、誠二の顔は真っ赤になっていた。

いつもクールに振舞っている誠二は、今回だけとても子供のようだった。

そんな顔されたら、恋しくなるじゃない・・・

そうして美咲は誠二から逃げるかのように東野家の車に乗り込んだ。

嫌いになんて・・・

キスされてから美咲と誠二が会話をすることはなくなった。

そして、ついに夏休みを迎えようとしていた。

「とうとう夏休みですわー！」

私の隣で由梨華がそう言った。

あのキスから誠二と会話していないことを美咲は気にしていた。そして誠二も・・・。

そんな二人の様子に気付いていた由梨華は仲直り計画を立てていた。

「ねえねえ、夏休み、旅行にでも行かない？私と私の彼氏と美咲と・・・誠二様で！」

「いきなりだね、っていうか由梨華、彼氏いたの？」

「ええ、もちろんですわ！私の婚約者なのよ」

そうだわ。由梨華にだって婚約者はいるわよね。

「で、旅行！行こうね！」

そうして由梨華に無理矢理誘われた旅行。もちろんお金持ちの美咲たちには何の苦でもなかった。

だが、美咲にとってキスされてから誠二と話していない。そのことで美咲は苦を感じた。

「美咲、誠二様を誘っておいでよ！」

「え！？無理だよ！」

「えーと、旅行はどこにしようかな・・・やっぱり海よね！ハワイとか？あ、でも私英語・・・」

そういつてどんどん決めていく由梨華。美咲の意見は完全無視だった。

由梨華が勝手に決めていつて、結局、沖縄になってしまった。

もちろんお金持ちの美咲は日本の都道府県を全て周っていた。

そしていつの間にか、放課後になっていた。

これで家に帰れば、夏休み突入だ。その前に誠二に旅行の誘いをしなければいけない美咲。

「引き止めてあげといたから、ちゃんと誘っておいてよね！」

由梨華はそういい残し、逃げるように教室を出て行った。

いつの間にか教室の中は、美咲と誠二のみになっていた。

美咲の心臓は爆発しそうなくらいドキドキしていた。そして

「あ、あの！夏休み、一緒に旅行しよう！」

勇気を振り絞って旅行に誘った美咲。すると誠二がいきなり笑い出した。

「な、なんで笑うのよ！こっちは勇気振り絞って言ったのよ！」

「・・・嫌われたかと思ってたから」

そう言った時の彼の顔はとても悲しそうで喜んでいるようだった。矛盾している顔だ・・・。

「別に・・・嫌いになんてならないわよ・・・」

「え、だったら好きってこと？」

「どうしてそうなるのよ！」

すると誠二は後ろから美咲を抱きしめた。その時の彼はとても優しく温かかった。

「抵抗しないの？」

その言葉に美咲は急に力チンと来た。

「ホントどうしてそんなムカつく言葉ばかり言うのよ！」

「美咲が俺をなかなか好きになつてくれないから」

どうしてそんな甘い言葉ばかり言うのだろう。美咲は我慢できず、

彼を突き放し少し距離をとり

「好きよ！大好き！嫌いになんて・・・嫌いになんてならないわよ
！」

そついうと顔を真っ赤にしながら美咲は逃げるように教室を後にした。

誠二は驚きと喜びで胸がいっぱいだった。

「ホント・・・美咲には敵わねえ・・・」

プラン無し旅行

旅行当日。7泊8日の旅行。時刻、朝の10時。

美咲と誠二、由梨華、由梨華の婚約者（寿 拓海）は誠二の自家用ジェット機に乗り込み、沖縄へと出発した。

高校生になって初めての旅行。美咲は誠二に告白したことを思い出すたびに顔を真っ赤にした。

沖縄の到着地は誠二の別荘。時刻、昼の12時。

「うわ、誠二様の別荘大きい！」

「ってかなんで俺のジェット機に俺の別荘で泊まりなんだよ！」

子供のようにふて腐る誠二。

「まあまあ。さて、さっそく中身拝見しに行きましょう！ね、拓海さん？」

「おう！」

そう言って二人は遠慮無しに別荘へ入っていった。

「俺たちも行くぞ」

美咲は誠二の言葉に肩を震わせた。あの告白から誠二のことを意識

しすぎてしまっているのだ。

そうして美咲と誠二も別荘の中に入っていった。

由梨華は自分勝手に「この部屋、私たちが使わせてもらっわね」といって、由梨華と寿は同じ部屋に入っていた。

由梨華と寿さんは同じ部屋か……。。

そう思った美咲は、後ろから感じる誠二の視線に緊張していた。

「じゃあ、俺はあっちの部屋使うから」

「え……。うん……。」

期待していた言葉と違うことを言われ、美咲はシュンとなった。そして誠二と逆の方向にトボトボと歩いていった。

「美咲」

すると誠二に呼び止められ、誠二の方へ振り返った。

「俺と一緒に部屋がよかった？」

そういうと誠二はニヤツと笑った。凶星を言われた美咲は顔を真っ赤にしながらフンツと言ってもとに振り返り歩き出した。

美咲はそこらへんの適当な部屋に入り、荷物を置いてダブルベッドに転がり込んだ。

その途端、どこからか由梨華の声が聞こえてきた。

『みなさん、聞こえていますかー？これからご飯食べに行こうと思うので玄関に集まってください！』

どこから通じているのだろうかと思ひながら、美咲は部屋を後にした。

既に3人とも集まっていて、庶民的な沖縄そばを食べることになった。

「ぶは、ご馳走様でした！」

満足したような由梨華の顔は、とても幸せそうだった。

誠二は庶民的な料理を食べたことがないのか、躊躇いながら口に運んでいた。

「よし！明日は海ですわー！」

そういつてプランをどんどん立てていく由梨華。

美咲は苦笑いをしながら沖縄そばを食べ終わった。

時刻、午後3時。

今日はもう疲れているということとで部屋で休むことになった。

夕飯はなぜかバラバラで食べることになってしまった。

「初日からこんなので大丈夫かな・・・」

そう心配しながら美咲はベッドに寝転がった。そしていつの間にか眠りについていた。

焼きそばパンはキス

いい匂いが部屋の中を包み、美咲は目を覚ました。

するとテーブルの椅子に座っている誠二の姿が目に入り、美咲は勢い良く体を起こした。

「なんであんたがいるのよ！部屋に入るときくらいノックしなさいよ！」

「は？したけど、返事ねえから入ってみたら、お前が爆睡してたんだろ？」

そ、そうか……。

誠二の言葉に一度は納得したものの、結局美咲は誠二に反抗するのだった。

「返事ないなら入らないでよ！お留守かもしれないでしょ！」

「別にいいだろ？俺のこと好きなくせに」

その言葉に美咲は顔を真っ赤にして、夏休み前日の放課後を思い出していた。言い訳することが出来ない美咲。

「だ、だったら誠二だって私のこと好きなら、好きな人の気持ちくらいわかってよね！」

そういつと誠二はいきなり立ち上がり、美咲の方へ近寄ってきた。

「じゃあ、美咲だって俺の気持ちわかって」

「はあ？あんたの気持ちなんてわかんないわよ！」

「俺が思ってることは・・・」

すると誠二は美咲の近くまで行き、美咲の耳元で囁いた。

「美咲の全部、俺に欲しい・・・」

美咲は目を丸くし、顔を林檎のように真っ赤にした。

そんな美咲を嘲笑うかのように誠二は微笑んだ。

美咲は頬を風船のように膨らませ、そっぽをむいた。

「全部って何よ、意味分かんない」

そういつと誠二は美咲を押し倒し、唇と唇が重なる寸前で止めた。

「じつじつこと」

美咲はまたもや真っ赤になり、熱を帯びていた。

誠二は美咲から離れ、笑いを堪えていた。

「ホント、ムカつく！ムカつくムカつく！」

そういつてまたそばをむく美咲。その瞬間、美咲のお腹が鳴った。

その音は誠二に聞こえていたらしく、誠二は笑いを堪えていた。

「これ、食べるか？」

誠二が持っていたものは焼きそばパンだった。どこかのコンビニで買ってきたのだろう。

「いる！」

そういつて美咲が焼きそばパンに手を伸ばした瞬間に誠二は焼きそばパンを上引き上げた。

「俺に愛を捧げてくれたらあげる」

誠二の言動に美咲は怒りを感じていた。

「何よ、くれたっていいじゃない！っていつか愛を捧げるなんてどうしろっていうのよ」

「キス・・・してくれたらあげる」

「はあ！？そんなの無理に決まってるでしょ！どうして私があんたなんかになんかに！」

「じゃあ、あげない」

誠二は焼きそばパンを握り締め、部屋を出て行くこととした。

「あー！もう！分かったわよ！すればいいんでしょ！」

美咲のお腹は限界を達していた。さすがに何も食べず、一晩を越すのは無理だと思った美咲なのだった。

そして誠二は美咲の方に振り返り、目を閉じてしゃがみ込んだ。

「あ、ほっぺとかダメだから」

「わ、わかってるわよ」

美咲は顔を真っ赤にしながら、誠二の唇に自分の唇を持っていき、軽くキスをした。

美咲は直ぐに唇を離し、誠二の手に握られていた焼きそばパンを奪い、テーブルの椅子に座って焼きそばパンを食べ始めた。

そして誠二は黙って部屋を出て行ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0740z/>

DS婚約者

2011年12月7日22時50分発行